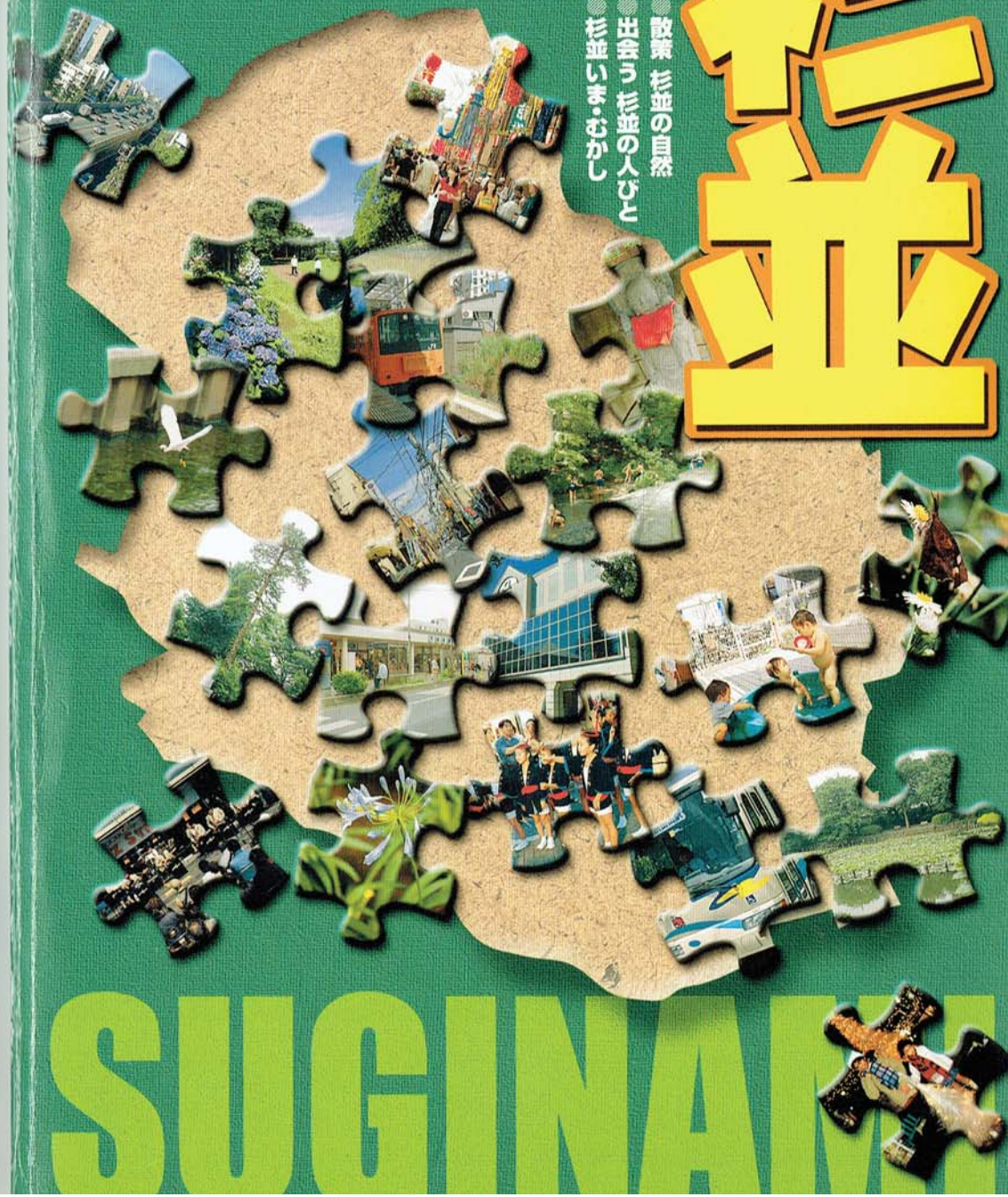


ぶらり発見 杉並

●散策 杉並の自然
●出会う 杉並の人びと
●杉並いま・むかし



Contents

散策 杉並の自然…………… 1

ふらり発見すぎなみ歩き 1

樹木を探す 6

スギ/サクラ/ケヤキ

草花にふれる 10

生き物を見守り、育てる 15

杉並で見られる昆虫/善福寺公園の野鳥たち

富士を仰ぐ 19

出会う 杉並の人びと…………… 22

われら杉並70歳 36

南北バス「すぎ丸」が行く! 38

杉並 いま・むかし…………… 40

Books & Internet …… 46

付: マップ杉並…………… 巻末

Essay

楽しきローカルバス風情【コラムニスト/泉麻人】 27

阿佐谷と私【ジャズピアニスト/山下洋輔】 29

郷愁をかきたてる地【コラムニスト/酒井順子】 31

「すぎ丸」の旅【歌手/庄野真代】 33

人の心が感じられる町を【評論家/吉沢久子】 41

式守井之助【作家・詩人/ねじめ正一】 43

西荻窪と私【漫画家/東海林さだお】 45

Column

1. 学校でタケノコ掘れた! 9

2. 緑のじゅうたんになった校庭 14

3. 「オシドリ天使」にお礼を 18

4. アジアと手をつなぐ杉並 35

「人心同」の碑

インド独立の志士、チャンドラ・ボース氏

*本文キャプション・解説中にある丸数字は、巻末のマップ上でその場所を印しています。ご参照ください。

散策 杉並の自然

「あの木はなんという木?」「あそこでコゲラを見ました」……参加者同士が情報を交換し、また本書の編集委員たちと「まち談義」に花を咲かせた「ふらり発見すぎなみ歩き」が善福寺川流域で開催された。都内では例年より早い桜の開花宣言が出された直後の2002年3月17日。参加者は500人をこえ、およそ2キロの流域を自由に歩き、さまざまな発見をマップに書き込んでいった。



①犬も集合
②編集委員を囲んで「まちの魅力」を語り合う(緑陰広場)
③「この木はですね…」説明に聞き入る参加者たち



こんな発見がありました!

多くの人びとからたくさんの「発見」が
よせられました。
一部ですが、イラストマップにして
記してみましたのでご覧ください。
ご協力ありがとうございました。



2002年3月17日(日)
午前10時~午後3時
★印は受付場所
□印は次ページに写真



と、足を止めてみたい 善福寺川下流沿い



①尾崎熊野神社のクロマツ
樹齢400年以上と推定される区指定天然記念物



②郷土博物館
杉並区3万年の歩みを展示



③白幡の地蔵
17世紀末から18世紀後半にかけて建てられた民間信仰の石塔

④大宮八幡宮
縁結び・安産・子育てに御利益があると、多くの参拝客が訪れる



和田堀公園
珍しいカワセミが生息するひょうたん池



⑤杉並児童交通公園 自転車やゴーカートなどに乗って交通ルールを学ぶ
⑥天王橋付近のサクラ 花見客が大勢訪れる名所





樹木を探す



深緑の街

松田輝雄の
杉並・樹木
レポート



家の前は麦畑だった。

そこは私が布製のランドセルを背負ったまま、いつしかくれんぼをして遊んだ畑。昭和の初めに両親が新婚生活を始めたここ「豊多摩郡杉並町字成宗」の風景は、私の少年時代にもそのまま残っていた。イタチやタヌキも出没していた頃。

もう一か所、私たちの大好きな遊び場があった。麦畑のすぐ近く、坂道に面した神社である。本殿脇に立つ大杉は、5人の小学生たちが両手を伸ばしても届かない。お宮さんのご神木だった太い杉の幹に飾られた長いしめ縄はいつも風に揺れていた。境内には他にも空に向かってそびえた山桜やどんぐり、杉の太木が森をつくり、夏にはアオバツクがホッホッと鳴いていた。

社の裏の崖にそびえる、やたらと真っ直ぐな杉が私たちの大切な宝物だった。小学2年生の夏休み、数人のワンパクと一緒に、私は恐怖心をポケットに押し込んで大巨木と感じていたこの杉をよじ登った。背の高い杉は太く、6〜7メートルほど登っても幹を抱えることができない。枝をつかむ指先に力が全部集まる。お宮さんの屋根がずっと下にある。高い、高い、高いぞ。私は幹にしが

みついたまま、もう逃げられないと観念した。恐る恐る首を上げて視線を遠くに移したとき「省線電車が走ってるぞ!」と、私は思わず叫んだ。1キロも先にある阿佐ヶ谷駅だってあんなに大きく見えるんだ!

この瞬間、男の子から男子としての仲間入りを許されたかと思えた。つかまっている大杉もきっと認めてくれていると感じた。

その年の秋。カスリン台風は強烈な風の力で、私がやっと登った杉だけでなく境内の多くの樹木をなぎ倒してしまった。

それから50年。ご神木の大杉は枯れ、山桜も巨木も他の杉も姿を消している。

江戸時代、青梅街道沿いの成宗村にあった見事な杉並木が現在の地名誕生の元という。当時は杉丸太の生産地でもあった杉並地区。

その杉並区に「杉」はないものかと、あちこち探し歩いた。家に近い善福寺川緑地にも、神社にも寺にも学校にも見つからない。大宮八幡宮や上井草でいくらかの杉と出会ったが、どこへ行っても見事なほど「杉」は消えている。

乾燥に弱く、開発に追われて消えた都会の杉。わずかに見ることができたのは、満ちた住宅で美しく剪定された庭木としての杉。育ちが早く、背も高くなり真っ直ぐな杉は、この時代の街にはふさわしくない樹木なのだろうか。

いま、高架を走るようになったJR阿佐ヶ谷駅ホームから見下ろすと、杉はなくともケヤキなどの濃い木立が家並を包み込み、道路を浮かび上がらせている。その緑の深さと柔らかさは子どもの頃とほとんど変わらない。

ただ、麦畑は消えている。そして、木の上から子どもたちの声が聞こえてこないのが残念だ。



玉川上水のサクラ

かつて玉川上水にたっぷり流れる水は、老緑(おいみどり)色だった。子どもの頃、堤を歩いたときは恐ろしくくらいに勢いがあつた上水。いまは上水跡地が公園となりサクラの名所に生まれ変わった。どこまで行っても終わらない長い公園と薄紅色の桜道が永泉寺緑地まで続く【下高井戸2丁目】②



井草森公園のサクラ

広い公園の東門入り口のすぐ右に立つ。見上げると空を探してしまふほどのサクラの巨木。株元から5本に枝を分けたサクラ。ソメイヨシノでもこんなに大きくなるんだと感心。花の重みで枝も下がる。園内に入ると池。池を取り巻くようにサクラの樹々。杉並の春が、かたまてここから出発するようだ【井草4丁目】④

久我山駅前の橋から上流に向かって歩く。細い散歩道の両側にサクラが続く。花の春には、私たちの顔をピンクに染めてくれるソメイヨシノ。60〜80年が寿命といわれているが、いま最も樹力がみなぎる若い並木。どこまで行っても花。神田川の水は深いコンクリートの壁の底を流れていて、美しい花はその上をおおう。写真は高井戸東2丁目③



神田川のサクラ

咲くのを誰もが待つサクラ。幸い杉並区は花見に出かける場所、公園や河畔が多い。春の景色を愉しむには恵まれたところ。区の中央を流れる善福寺川の両岸・緑地をはじめとして、社寺林、グラウンドでもサクラの花から春が動き出す。あとは私たちの心がサクラの近くに行き、花の便りに胸をときめかせればよい。春だけでなく、濃い緑になる葉の下で時を過ごすのも至福の時。



清水さん宅のスギ
【今川2丁目】①





中杉通りのケヤキ

並木通りを歩くとき、気持ちが揺れるのは4月の芽吹き。小さな花芽が、ふくらんでくる春に気づく。若苗色に伸び出した葉の付け根が紅色になって、花が咲くケヤキ。区役所から北へ真っ直ぐの道に直立し、夏の木陰、秋の紅葉をと愉しめるケヤキ並木は早稲田通りまで。四季の移ろいを知らせてくれる散歩道 [阿佐谷南1丁目] ⑤



武井さん宅のケヤキ

芽吹きときは新緑の明るさを、夏には木陰を提供する。秋には黄褐色に葉を変えて実りのときを示し、葉を落とした細い梢の先端を通して、空の広さを教えてくれる冬。武蔵野の風景を象徴する樹。その代表がケヤキ。天を突き、丸く、強く、それでいて柔らかな小枝を広げるケヤキ。生活の場に最も近くに植えられ、暮らしに必要であったケヤキ。区内に残る巨樹、なかでも主役のケヤキを見に行こう。



ヒイラギ、サカキ、サザンカなどの常緑の生垣は区内で最も長い200メートルを越している。その垣根に包まれて、250年もの間、人びとの営みの中心に在った6本のケヤキがそびえている。木の下は夏の日差しをさえぎり、風が急におとなしくなって涼しさを創ってくれる。街の中の泉を思わせる樹 [狹窪1丁目] ⑥



井口さん宅のケヤキ

遠くから森が見える。近づくと森を思わせたのは1本のケヤキ。巨木は地表のすぐ上から扇型に枝を広げている優れた姿。区内で最も幹が太く、5メートル30センチ。樹齢は450年 [上井草2丁目] ⑦



西田小学校の北隣。武蔵野の雄木林を再現した公園。高い丘に樹木が茂っている。足もとの小さな植物は、大きく育ったケヤキ、シデ、コナラなどの葉陰で遠慮がちに生きている。この地下には縄文時代の遺跡が眠っている [狹窪1丁目] ⑧

Column-1

学校で
タケノコ掘れた!

方南小学校 (方南1丁目) [⑩] では、車の排気ガスから子どもを守ろうと、30年ほど前から校庭の一角にモウソウタケやクヌギ、ユーカリなど400本を植えてきた。そして木々は年々育ち「むさし野の森」と呼ばれる小さな森となった。2002年6月、新入生の1年生は小さなシャベル、6年生はスコップを持ってこの森に集合。タケノコ掘りに挑戦した。1年生にとっては初体験のタケノコ掘り。手足を泥だらけにしなが、6年生の応援を得て1時間ほどで20本を掘り出した。苦労して掘り出したタケノコを見て、1年生は全員満足顔。収穫したタケノコは、タケノコご飯として翌日給食に出され、全校児童のおなかを満たした。



樹木を探す



成田西いこいの森公園

五日市街道、関東バス営業所に並んで、青を高く伸ばしたケヤキが歩道に残っている。善福寺川への細い坂道を北に入ると「杉並区保護樹木」の札を下げたケヤキと出会う。サクラと並んでケヤキやトウカエデの枝が流れの上に枝を伸ばす。犬の散歩、フリスビーで遊ぶ親子らの憩いの広場。ケヤキの集いを眺める公園なのだ [成田西3丁目] ⑨



草花にふれる

何気なく通り過ぎてしている道端や、散歩に出かけた公園でふと目をこらすと、こんなにも可憐な花を見つけることができる。時にはひっそりと、時には誇らしげに……。
[写真：中畑博さん]



ユキノシタ

[大宮2丁目宮下橋付近／5月～6月] ©



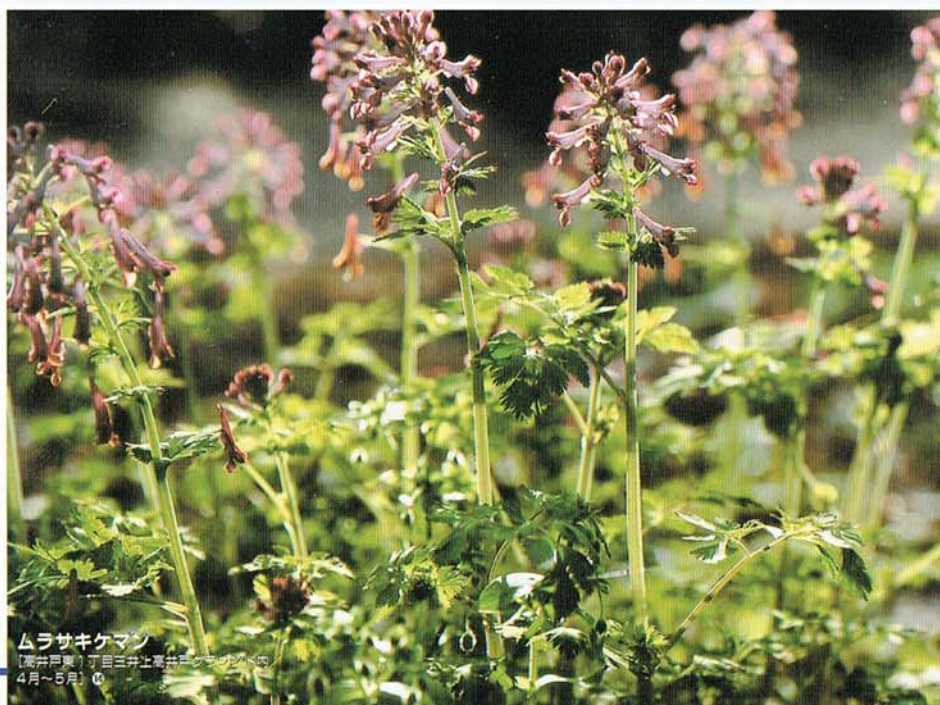
オニタビラコ

[曾根寺川土手斜面／暖かいと1年中] ©



カキトウシ

[大宮2丁目宮下橋付近／4月～5月] ©



ムラサキマン

[大宮2丁目宮下橋付近／4月～5月] ©



ネジバナ

[大宮1丁目／5月～8月] ©



ホトケノザ

[大宮2丁目和田堀公園内／2月中旬～6月] ©



ツクサ

[大宮2丁目和田堀公園内／6月～9月] ©



ムラサキカタバミ

[大宮2丁目和田堀公園内／4月中旬～7月] ©



レンゲソウ

[大宮2丁目三井物産ビル前／4月～5月] ©



キキョウ

[大宮1丁目／3月～5月] ©



散策杉並の自然

SUGINAMI

SUGINAMI



散策杉並の自然





平和を願って咲いた、アンネのバラ



高井戸中学校正門入り口の花壇にアンネ・フランクゆかりのバラが咲いている。30年ほど前、生徒たちが『アンネの日記』の感想文をアンネの父オットーさんに送ったことから交流が始まり、このバラが贈られてきた。アンネが屋根裏部屋からいつも眺めていた野バラをその後改良した「アンネ・フランク」と呼ばれるもので、オレンジからピンクに色が変わる珍しい品種。平和と幸せの願いをこめて育てていこうと、先輩から後輩へと受け継がれている【高井戸東1丁目】②



山田さん宅のサギソウ

杉並野草の会で長く会長を務めた山田収二さん宅の庭には、真っ白なサギソウが咲きほごり、毎年、近所の人びとの目を楽しませてくれる。山田さんはサギソウを育てて35年、その品種は約20種5000株にのぼる。花のかたちが白鷺が舞う姿に似ているので名付けられたサギソウ。7月から8月にかけて、たくさん花を咲かせるその姿は、夏の暑さを忘れさせてくれる【南荻窪2丁目】②

冬期に彩りを添える区の花
サザンカ



自然に親しみも古典にふれる
万葉植物園

草花にふれる

1987年に向陽中学校の創立40周年記念事業として開園された植物園。『万葉集』に詠まれている植物164種のうち160種を集めている。約100メートル続く「万葉の小径」の植物には、それぞれ万葉の歌が刻まれた札が立っている。植物を観察しながら、古(いにしえ)の世界にひたる空間【下高井戸3丁目】③



四季折々の草花で彩られる
大田黒公園



数 寄屋造りの茶室のある回遊式日本庭園。音楽家・大田黒元雄氏の屋敷跡を公園としたもので、1981年に開園。四季を通じてさまざまな草花・樹木を楽しむ散策コースとなっている【荻窪3丁目】④



街中のプロムナード 桃園川緑道



18 桃園川の地上部を緑道とした東西1.7キロの公園。区では「自然と花し合いコース」の一つとして新たな整備をすすめている。これはいまだ公園にはあまり植えられなかった花木を植えて、植物園のように楽しんでもらおうというもの。桃色をテーマに色鮮やかな花が街をうるおす [阿佐谷南2丁目～高円寺南1丁目] ㊟

Column-2

緑のじゅうたんに なった校庭

2002年度の和泉小学校（和泉2丁目）[㊟]の新学期は、いまだかつてない新緑のなかでスタートした。校庭が全面芝生になったのだ。区の21世紀ビジョンの一環として実現した「都内で初」の試みである。1年中緑が変わらない“スポーツターフ”という洋芝の維持管理は、本校の教職員と「グリーンプロジェクト」で行われている。PTA、スポーツ団体、NPO法人など地域のボランティアで組織されたグループだ。休み時間には裸足で校庭に飛び出し、追いかけっこをしたり、寝ころんだりする子どもたち。「ケガする子どもが減ったのはもちろんですが、芝生とふれあうことによって子どもたちはリラックスし、心と身体にゆとりを感じているようです」と上田教頭はうれしそうに話した。



昆虫 杉並で見られる

蝶の仲間はこちら何年かで31種類を見ているが、よく出会うのはその半分くらい。ムラサキシジミやテングチョウやハグロトンボ、キチキチキチと音を出して飛ぶショウリョウバッタなどの里山の昆虫がいるのはうれしくてことだ。里山に似た環境は、雑草の繁る一角や落葉のたまり場など、年間を通してあまり人手が加わらないところで、ここが彼らのオアシスだ。[文・写真：宮内隆夫さん]

生き物を見守り、 育てる



アオシメアケハは
ヤブガラシがお気に入り
[下高井戸4丁目・第三公園内／5月] ㊟



ツツジを訪れた
キアゲハ
[下高井戸5丁目・山公園内／5月] ㊟



初夏の日差しに輝く
マメコガネ
[大宮1丁目・和田公園内／7月] ㊟



日向ぼつこの
ムラサキシジミ（雌）
[下高井戸5丁目・山公園内／1月] ㊟



一休みのオオシオカラ
トンボ（雄）
[下高井戸2丁目・玉川上水第三公園内／7月] ㊟



緑に映えるベニシジミ
[大宮1丁目・和田公園内／7月] ㊟

野鳥たち

善福寺公園の

野鳥が集う都立善福寺公園。戦前（昭和4年～11年、14年～19年）日本野鳥の会創立者中西悟堂氏が善福寺池の近くに住み、池周辺での生物観察から野鳥への追求を経て、昭和9年に日本野鳥の会の創設となった場所だ。現在も、上池（ポート池）下池周辺では野鳥が数多くいる。水鳥のカイツブリ、カルガモ、バンが毎年繁殖し、秋から冬にかけてはオナガガモやコガモがいる。『ビデオ杉並の野鳥』（平成11年杉並区広報課制作「野鳥解説」西村真一）に登場する野鳥も、9割方はこの善福寺公園での撮影。それほど野鳥の多い場所である。[文・写真：西村真一さん]

野鳥が集う都立善福寺公園。戦前（昭和4年～11年、14年～19年）日本野鳥の会創立者中西悟堂氏が善福寺池の近くに住み、池周辺での生物観察から野鳥への追求を経て、昭和9年に日本野鳥の会の創設となった場所だ。現在も、上池（ポート池）下池周辺では野鳥が数多くいる。水鳥のカイツブリ、カルガモ、バンが毎年繁殖し、秋から冬にかけてはオナガガモやコガモがいる。『ビデオ杉並の野鳥』（平成11年杉並区広報課制作「野鳥解説」西村真一）に登場する野鳥も、9割方はこの善福寺公園での撮影。それほど野鳥の多い場所である。[文・写真：西村真一さん]

善福寺公園上池

カワセミ [1年中] ◎

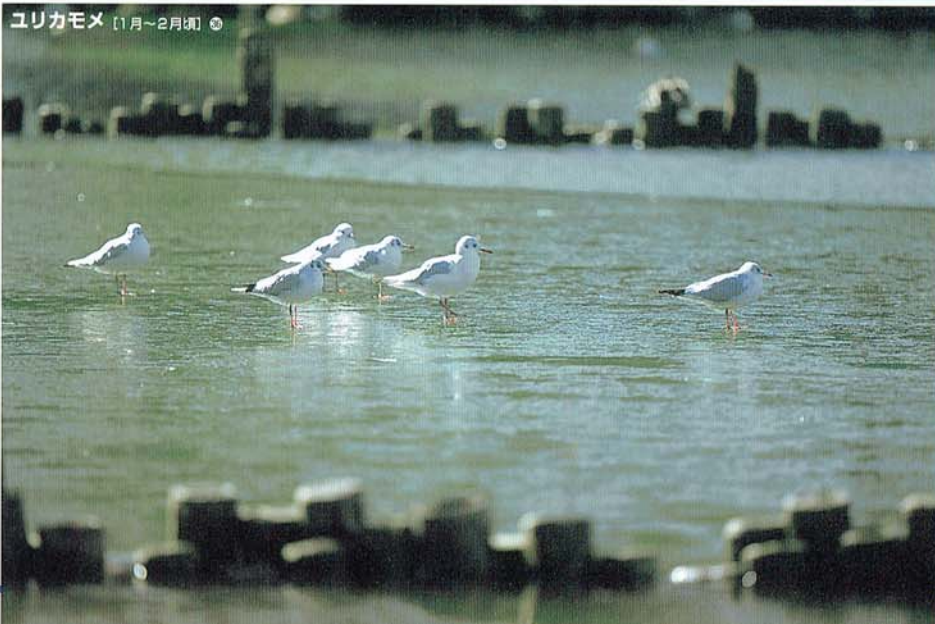


ダイサギ [1年中] ◎



カイツブリ親子 [1年中] ◎

ユリカモメ [1月～2月頃] ◎



生き物を見守り、育てる

ゴイサギ [1年中] ◎



コサギ [1年中] ◎



善福寺公園下池



カルガモ親子 [1年中] ◎

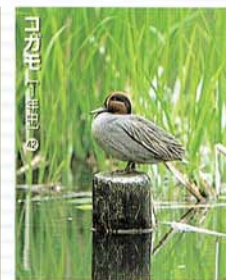
富士を仰ぐ

「道路や駅のホーム、公園など公共の場所で富士山が見える場所を教えてください」——区の呼びかけに応じて区民から寄せられたのが、富士の見える“新名所”。ビルの陰から、あるいは電柱や電線の間から、さまざまな表情をあらわす富士の姿が見える。

高井戸西1丁目7
(第六天神前・天神橋歩道橋上) ㊦



阿佐谷南1丁目15-1
(杉並区役所本庁舎9F食堂) ㊧



オナガガモ [9月-3月] ㊨

Column-3 「オシドリ天使」にお礼を

鳥取県日野町はオシドリの里として知られる。杉並第二小学校(成田西3丁目) ㊩の佐々木先生はこの日野町出身。数年前から生徒たちとオシドリの大好物であるドングリを拾い、日野町へ贈り交流が始まった。先生のクラスでは秋のドングリ拾いは恒例となり、2000年には、卒業生や幼稚園の協力もあり、贈ったドングリは120キロに。2001年3月、5年生14名がオシドリ観察のために日野町を訪問。その際、前年に起きた鳥取県西部地震への義援金を持っていき、「オシドリ天使」として大歓迎を受けた。写真は日野町のオシドリグループがお礼に杉並二小を訪れ、子どもたちと再会したときのもの。

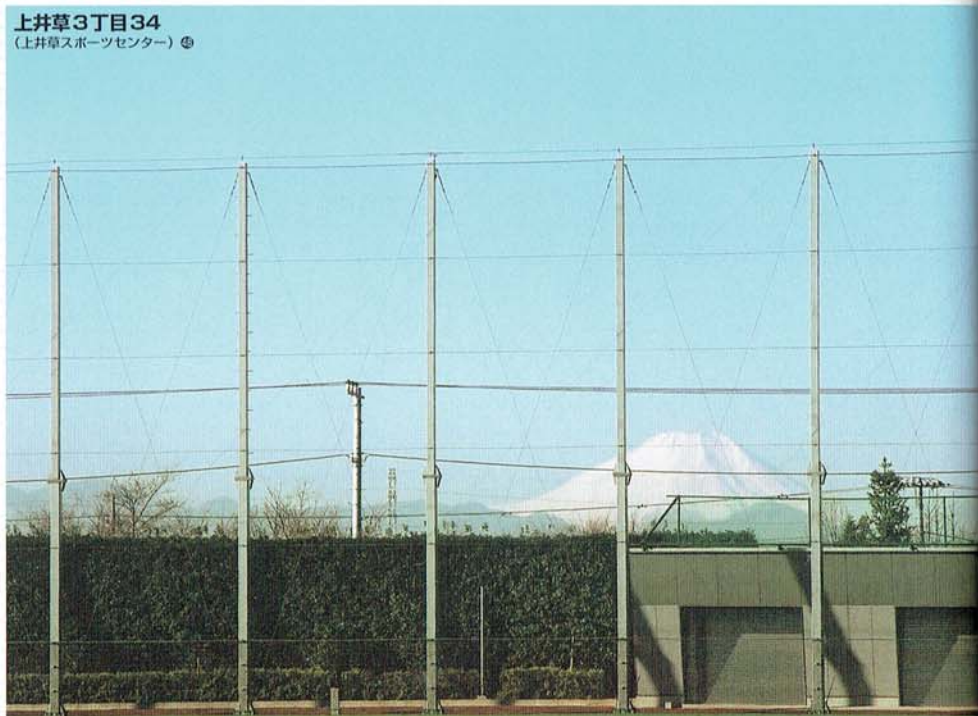




善福寺1丁目2



浜田山2丁目5
(杉並南中央公園入り口)



上井草3丁目34
(上井草スポーツセンター)



梅里1丁目8
(五日市街道・新高円寺地下自転車駐車場前)



出会う 杉並の人びと

SUGINAMI
People

①

農園を 子ども達の 遊び場に

松原宏武・由美子夫妻

区指定を受けた大きなケヤキの木、羽根つきの玉になるムクロジの木、緑色の花を咲かせるウコンザクラ……。都会のど真ん中とは思えない広大な敷地だ。ここで農業を営んでいる松原宏武・由美子夫妻は、5年ほど前から畑を子ども達に遊び場として提供している。「風の音を聴きにきたり、写生をしにきたり、芋掘りを手伝ってくれたり……。保育園や幼稚園の子ども達の話をするとき、夫妻の笑顔はとびきり素敵だ」[清水2丁目在住]



造園学、地域計画論の専門家であり民間コンサルタント業の草分けでもある前野さんは、永年の経験を活かし、区政モニター、杉並まちづくり研究会エボスなどを通じてさまざまな「まちづくり」を提案している。その前野さんのいう「観光」とは、本来「国の光を観る」ことで、それは「地域の人びとが築き上げてきた成果（光）を学ぶ（観る）」ことだ。地域を愛する心からあふれるアイデアは今日もつきない[和泉4丁目在住]

SUGINAMI
People

②

杉並を観光地に

前野淳一郎さん



SUGINAMI
People

③

「知る区ロード」を 卒論に

菅谷奈緒美さん

そもそも防災の視点から「歩いて杉並を知ろう」と定められた「知る区ロード」は、全長36キロで区内のほぼ全域をカバーしている。小学生の頃から「知る区ロード」探検に参加し、まち歩きの魅力にとりつかれた菅谷さんが大学の卒論に選んだのがこの「知る区ロード」。「自分が好きなものを卒論のテーマにしたい、と考えていたら、生まれ育った杉並のことを思い浮かべました」。約1年をかけた力作の副題は「地域におけるまちづくりの実践を考える」。菅谷さんの結論はこうだ。「知る区ロードが成功し継続しているのは、区民と行政が歩みよってキャッチ・ボールがうまくいったことだと思います」[天沼2丁目在住]



SUGINAMI
People

④

ラジオ体操でいつもイイ汗

小川正平さん

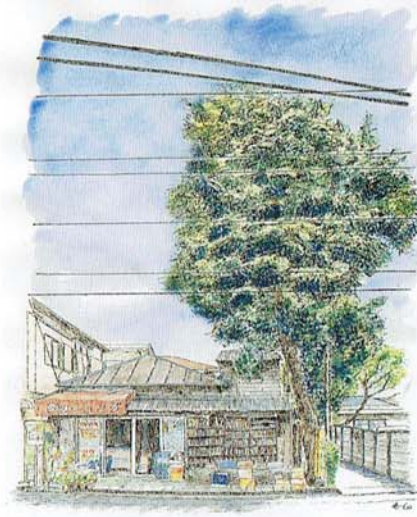
年中無休で毎朝6時15分から 300人以上が参加している妙正寺公園ラジオ体操会。「下井草に住んで20年、ほとんど毎日休まずに続けてきたのは、参加者同士のコミュニケーションかな。誰か休むと、あれ、どうしたのかな？ってさびしいですよ」。夏休みには参加者が1000人をこえるとか。小川さんは今日も元氣だ[下井草4丁目在住]




 天沼3丁目
(教会通り商店街) 〔5〕


今川4丁目 〔5〕

西荻北4丁目 〔5〕



30年近く杉並に住む大瀧さんは、ここ1年ほど前から「ふつうなら絵にならない」ような日頃見慣れた町並み・街角をスケッチするようになった。「画用紙にサインペンで描いた風景を複写機でコピーし、6色の水彩絵の具で着色しただけ」と、本人は謙遜するが、でき上がった絵はなんとも心暖まる“郷愁”を誘う〔清水3丁目在住〕



住みなれたまち
「杉並」を描く
大瀧安良さん



下井草4丁目 〔5〕

下井草4丁目 〔5〕

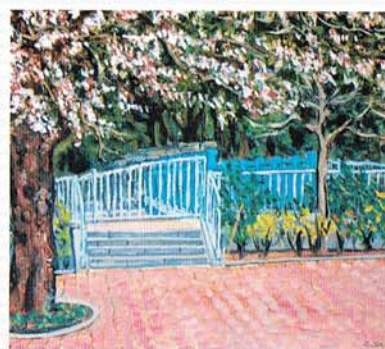


桃井3丁目 〔5〕

 本天沼1丁目と
2丁目の間 〔5〕


上井草4丁目 〔5〕





① 西田橋 [成田西3丁目] ②
 ③ 宿山橋 [大宮1丁目] ④

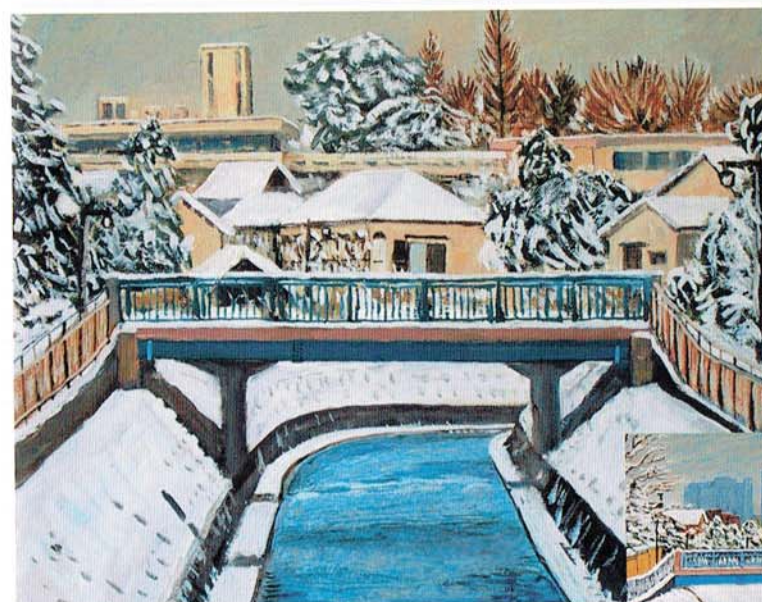


⑤ 屋倉橋 [成田西4丁目] ⑥
 ⑦ 大成橋 [成田東2丁目] ⑧



SUGINAMI People ⑥
**住宅地を流れる
 小さな川の四季を表現する**
 初山進さん

油 絵はすべて善福寺川にかかる橋。5年がかりで27本の橋を描いた力作の一部だ。地元の人でさえその名を知らないような小さな橋が、四季の移ろいのなかでさまざまな表情を見せている [堀ノ内1丁目在住]



⑨ 二枚橋 [松ノ木2丁目] ⑩
 ⑪ 本村橋 [堀ノ内2丁目] ⑫ ⑬ ⑭



杉並(成田西)に暮らすようになって十年になる。いまの場所に引っ越してきた理由はいくつかあるけれど、その一つに「五日市街道の狭い道幅のポイントが近い」というのがあった。最近、惜しくも幅は広がってしまったが、関東バスの車庫の手前のケヤキ並木が道路にせり出したような箇所、のことだ。一見、箱根の旧街道を思わせる林間の狭隘路でバスがきりきりとすれ違う光景が、たまらなく好きだった。

僕のような「昭和30年代調のバス風景」を好むマニアにとって、数年前から浜田山・阿佐ヶ谷間を往環している「すぎ丸」(南北バス)は面白い。車体は新式の小型バスだが、旧道風情漂う鎌倉街道をくねくねと進んでくれるのが、とてもいい。往時の沿道風景を想像しながら、ローカルバスの気分を楽しんでいる。

そして先頃、永福町と高円寺を結ぶ面白い路線がまた一つ増えた。松ノ木住宅までは以前から京王バスが走っていたが、こんどのバスはその先の松ノ木商店街のなかを抜けて、五日市街道へと突き進む。昔ながらの店屋が並ぶ松ノ木町の筋で、関東と京王のバスが交差するショットなどは格別である。

「狭い所を危なっかしい」といった意見を唱える人もいるようだが、僕はいずれの路線もいまのところ、ウマくいっているように思う。何より、この二つのコミュニティーバスの運転手さんは、実に運転がていねいで、接客の態度も素晴らしい。昔風のきりきりの道を守る方が、バス運転手としてのモチベーションが上がるのではないが……と推理している。

楽しきローカルバス風情

Essay

Izumi asato

泉 麻人

コラムニスト



児童青少年センター 「ゆう杉並」に集う 中高生たち

SUGINAMI
People 7



毎日100人以上の中高生でにぎわう児童青少年センターは、1997年9月に開設された区内で42番目の児童館。施設全体は男女平等推進センターとの複合施設で「ゆう杉並」の愛称で親しまれている。中高生を主な利用者とし、文化・芸術・スポーツなどの活動や交流の場となっている。建設時から中高生の意見を取り入れ、現在も「中・高校生運営委員会」を設置して運営に彼らの意見を活かしているアクティブなスペースだ〔荻窪1丁目〕

SUGINAMI
People 8

中高生情報誌『セドル』の 編集メンバーたち

中高生による中高生のための雑誌、それが『セドル』（フランス語で「杉」の意味）だ。区が開催した「中高生情報誌づくり」編集講座に参加した中高生によって企画立案、編集されたユニークな雑誌。2001年10月に1号が完成、現在は2号を編集集中。他の雑誌では知ることのできない中高生から見た杉並や彼らの考え、思いが詰め込まれているこの雑誌は、一読の価値ありである



毎年10月の末日に開かれる阿佐谷ジャズストリートは、2002年で8回目を迎えた。南は青梅街道から北は早稲田通り周辺まで、広範囲に会場が設けられ、観客はそれぞれ好きなスポットを巡りジャズを堪能する。出演者は200～300人、入出は1万人あまり。いまや秋の風物詩になったジャズフェスティバルだ

SUGINAMI
People 9

ケヤキ並木の街から ジャズがあふれる2日間 阿佐谷ジャズストリート



阿佐谷北4丁目に引っ越してきたのが、中学生の頃で、そこから毎朝電車に乗って港区の学校に通った。当時、天祖神社といった今の神明宮のわきの道を毎日歩いて往復していた。阿佐ヶ谷駅はまだ木造で高架工事は始まっておらず、踏切りがあり、駅舎の前の広場には土の部分も多かった。

そこに大道芸人というか物売りというか、アヤシイ人たちがきて色々なことをやって見せてくれた。どんな複雑な計算も簡単に答えの出る秘伝の術が書かれた本を売る大学帽の中年男とか、ガマの油の類いのすぐに傷がなおる軟膏を売るおじさんなど。もっともこれは、猛毒蛇の「チョロちゃん」に腕を噛ませる噛ませると言いながら、袋の中でうめく「チョロちゃん」は最後まで姿を現わさないという、毎回子供の期待を裏切る巧妙なものだった。別の武者風の男は、竹の棒の先にかなり大きな石を結びつけ、それを伏せた茶わんの上に気合いもろともせると、棒は斜のまま立った。これはいまだに不思議だ。

南口一番街に飲みに行くようになるの

阿佐谷と私

Essay
Yamashita Yosuke

山下 洋輔

ジャズピアニスト



は、ずっとあとのことだが、これは癖になって毎日出かけた。行きつけの飲み屋で知り合った大工のアキちゃんは、面白い議論を展開する凄いインテリだった。練習用の自宅のピアノに88個の鉛を植えこんでもらって指を鍛えようとしたのもこの頃だった。

阿佐谷には思い出がつきず、それは今も蓄積されて行く。年に一度阿佐谷に出現するジャズストリートという不思議でアヤシイ時間の中で、今年も行き交うすべての人々が、その出会いを忘れ得ぬ面白い記憶としてとどめてくれることを願っている。

もっと身近に音楽を

日本フィルハーモニー交響楽団



音楽を通じた地域のまちづくりを目的に、1994年から杉並区は日本フィルハーモニー交響楽団と友好提携を交わしている。公開リハーサルや区役所でのロビーコンサート、小中学校や福祉施設への出張コンサートなど、コンサートに来られない人にも音楽にふれてもらいたいとの願いが実現した



敷きの大広間でロックが流れる、と思いきや曲は「365歩のマーチ」や「川の流れるように」。高齢者活動支援センターの“ふれあい歌謡ステージ”では若手のロックバンドが大人気。「元気が歌を聞いていると気持ちが若返ります」と大喜び、踊り出すお年寄りまで。若者の集うライブハウスとは一味違う反応に、メンバーは「たくさんの人に受け入れてもらえてうれしい。笑顔をもらいました」とほほ笑みながら語った

ロックバンドが

懐メロやタンゴを演奏

女性コーラスグループ「妙音」は敬老会の活動を機に、今から20年前、活動を始めた。現在、メンバーの平均年齢は約80歳。最高年齢の方は94歳だそう。歌声はみずみずしく、歌っているときの皆さんの笑顔は輝いている。夏と秋に開かれる区のコーラス大会では凛としたハーモニーを披露。「妙音さんのようにいくつになっても舞台上で歌いたい」と目標にしている区内のコーラスメンバーもいるとが。いつまでもその歌声が響きますように

今もみずみずしい

乙女の歌声

妙音コーラス



私は杉並生まれの杉並育ち、高校までは学校も杉並区内という、杉並人です。現在は杉並に住んでいないものの、「杉並」という文字を見ると、たとえそれが「日光の杉並木」であっても、何となく親しみを感じる。

杉並区というのは、さほど強い個性を持っていない区のような気がします。港区や渋谷区に住んでいるとなると「おっ、おし

やれ」という感じがしたし、台東区や墨田区であれば「おっ、下町だねえ」という感じ。対して我が杉並区は、おしゃれでもなければ下町でもなく、至って普通なのです。

実家にいた時分、「杉並区に住んでいます」と言うと、比較的多い反応としては、

「昔の彼女（もしくは彼）が住んでた」「おばあちゃんが住んでいる」というもの。少し年配の人になると、

「大学生になって、初めてアパートを借りたのが、杉並だったなあ」という人も多い。そう考えると杉並区というのは、おしゃれでも下町でもないけれど、多くの人に多少の郷愁をかきたてる地なのではないかという気がしてきます。杉並のことを語る時、人は少し遠い目をする、のではないかと

昔の恋人、おばあちゃん、学生時代の記憶……。普通の人々の、普通であったりなかったりする人生の思い出を静かに包み続ける杉並区が、私は結構、好きなのです。



Essay

Sakai Junko

酒井 順子

コラムニスト

SUGINAMI
People
13

自宅を開放し「きずなサロン」

地域でふれあいの場をつくる寺田明子さん



毎月10日に自宅で「きずなサロン」を開催している寺田明子さん(左から3人目)。2001年11月よりはじめた。「きずなサロン」とは社会福祉協議会が推進している地域でのふれあい交流の場。最初はコンサートなどのイベント中心と決め、人が集うことでゆるやかな近隣関係が地域に生まれたいと考えていたとのこと。人とという字が支え合う形であるように、地域のふれあいの場として役立ちたいというのが寺田さんの願いである。写真は毎回恒例のコラスタイム「下高井戸5丁目」

スタジオが連携して アニメ制作を

川本征平さん



アニメ制作40年をこえる川本征平さんは、2001年、「杉並アニメ振興協議会」を結成し、初代会長に就いた。杉並区はアニメ制作会社の集積度が日本一。この地域を軸として各スタジオが結集し、行政ともパイプをもちながら優れた作品を提供しよう、というのがこの協議会設立のねらい。第1回作品「さよなら、みどりが池」(写真は登場キャラクター)のこの秋完成に向けて、川本さんの熱い日々はつづく



SUGINAMI
People
14

動物を通しての ネットワークづくりに 情熱を注ぐ

木村はるみさん

SUGINAMI
People
15



「NPOすぎなみ環境保全フォーラム」理事の木村はるみさんは、音楽教室経営のかたわら、捨て猫・捨て犬の保護に力を注いでいる。また、毎月第2金曜日には「西荻あっとホーム」で、動物と触れ合うことで癒し効果が得られるアニマルセラピーに取り組んでいる。目下の課題は仲間づくり。行政・地域と連携しての動物の里親活動をはじめ、捨て猫・捨て犬の実態調査、地域・学校とのネットワークづくりと夢は尽きない。「まだはじまったばかり。これからなんです」と語る木村さん。着実に仲間の輪は広がっている【今川3丁目在住】

「すぎ丸」の旅

Essay
Shono Mayo

庄野 真代

歌手



阿佐ヶ谷駅と浜田山駅を結んで走る『すぎ丸』は働き者だ。地元の音楽仲間と結成したバンドのひとりが路線に住んでいるため、リハーサルに行く時などよく利用するが、とにかく可愛い。

以前、阿佐ヶ谷駅で電車を降りて浜田山まで、『すぎ丸・全駅制覇』したことがある。駅のロータリーでちょこんと待っている『すぎ丸』は、公共のバスというより『お迎えロボ犬』。「右、曲がりますからご注意ください

ださ〜い」という運転手さんの声もやわらかく、親切な案内にほっと心が安らぐ。10人ちょっとのお客さんを乗せたバスは区役所を左折し、今度は税務署に向かった。税務署は年に一度くらいしか足を運ばなかったが、いまだ行く手段がなくて遠のいていたのかもしれない。そしてバスは狭い道をちょろちょろと進む。細い曲がり道で対向車とすれ違う時など、「さすが、すぎ丸!」とその機敏な身のこなしに拍手をしなくなる。団地の赤ちゃん連れママを乗せ、お買い物に行くお年寄りを乗せ、営業回りの青年を乗せて、『すぎ丸』はくねくね走っていく。坂道もナンノソノと元気に走っていたら、向こうから別のすぎ丸がやってきた。ちょっと照れたようすで、すれ違いざまに「よおっ」と笑顔で合図を交わす二人(?)。なんだか嬉しくなる。

バスは所要時間22分で折り返し地点の浜田山駅に到着。係りの人に誘導され、駅前の定位置でしばし休憩する『すぎ丸』くん。さあ、みんな待ってるよ。





Column-4

アジアと手を
つなぐ杉並

「人心同」の碑

久我山稲荷神社（久我山3丁目）〔9〕の境内に「人心同」と彫られた石碑がある。碑文を書いたのは朝鮮李朝末期の政治家で甲申政変の中心人物であった金玉均（キム・オクギン）氏。朝鮮の改革には日本の援助が必要と、1880年に日本へ派遣され、福沢諭吉、後藤象次郎らと親交を結んだが帰国後クーデターに失敗。日本に亡命ののち小笠原に移された。そこで出会った飯田作右衛門から「老父の住む久我山に親不孝をわびる碑を立てたいから碑文を書いてほしい」と頼まれ、書いたのがこの碑文である。金氏も敗残の身で遠い祖国の父母の身を案じ、「人の心は同じ」との思いで書いたことからこの碑銘がつけられた。碑文の内容は以下の通り。

「私は小笠原島で、飯田作右衛門君と会って、お互いに心を開き、心を許し合う友となった。ある時、作右衛門君は『私は子供の時、大病に罹り、親に随分苦勞をかけて成長したのに、若い頃から家を飛び出し、商売のため諸所を歩き、親と一緒に住んで孝行したことがなく、今は小笠原島に来てしまった。七十歳を越えた老父は東京に住んでいるが、遠く離れているので、朝夕そばに仕えることができず、ただ心の中で思っているのみである』と語り、私は『養育してくれた親の恩は、太陽の恩と同じような広大なものと思う』と、語り合ったことがあった。今日、作右衛門君から『老父の住んでいる地に、自分の不孝の罪を銘記した石碑を立てて子孫に示し、その戒めにしたいから碑文を書いてくれ』と頼まれた。私は、その言葉に心を打たれ、その場でこの文を書いて贈る。戊子（明治二十一年）七月上旬」

インド独立の志士、
チャンドラ・ボース氏

蓮光寺（和田3丁目）〔70〕本堂の左手前に、チャンドラ・ボース氏の供養碑がある。インド独立の志士であった氏は、インド人の力のみでは英国から独立できないと考え、日本に援助を求めた。第2次世界大戦の際、ビルマで独立軍を編成し日本軍とともにインドに軍を進めたが、日本の敗戦もあり結局この進攻作戦は失敗に終わった。終戦の年（1945年）、氏は飛行機事故で亡くなったが、その遺骨は蓮光寺に安置供養されていた関係から供養碑が建てられた。戦後、ネル、ガンジー両首相もお語りに来られたという。胸像には「御仏の光が真心と平和に向かって人々のために永久に私達を導かれんことを」と記されている。

SUGINAMI
People
16子育て支援
ひろば「いちょうの木」

「子育てのできるネットワーク」を合言葉に、小関啓子さんは3年前にこのひろば「いちょうの木」をはじめた。4か月児から2歳児を中心に週3回開かれるこのひろばは、子育てに関する相談はもちろんのこと、子ども・親同士の自由なコミュニケーションの場として活用され、地元の人びとの根強い支持を得ている【阿佐谷北3丁目】67

地域に
開かれた
朝鮮学校SUGINAMI
People
17

東京朝鮮第九初級学校では、チャリティーバザーなどさまざまな活動を地元住民と一緒にやっている。活動の中心になっているのは、アボジ（父）会とオモニ（母）会。住民同士が日常生活で共に話し、行動し、理解を深めていこうという身近な「国際交流」だ。また同じ学区内の杉並第一小学校とは、音楽を合同発表したり、交換ノートを行ったり、20年来の交流がつづいている【阿佐谷北1丁目】68



恩田 錦子さん
〔阿佐谷南1丁目在住〕

パールセンターで店を始めて50年になります。このあたりは心が豊かな人が多いので、住みやすくして商売もしやすいんですよ。大規模開発で大きく変わるとは思いますが、もっと魅力的なまちへ、商店街へ、と発展すると期待しています。



長尾 江子さん
〔阿佐谷南1丁目在住〕

阿佐谷で生まれ育ちました。子どもの時の遊び場でもあったけやき屋敷の林や中杉通りのケヤキ並木など、良いところがたくさんあります。亡父のモットーだった「和」を大切に、今までと変わらずまちの人どうし思いやりながら暮らしていきたいと思っています。



山北 徹さん
〔梅里2丁目在住〕

子どもの頃遊んでいた善福寺川付近はすっかり変わりましたが自然が残っていて散歩にお勧めです。定年後改めて生まれ育った地域に戻り、今、楽しく活動しています。男性がもっと地域に出てきてほしいですね。

このあたりが開けたのは昭和8年に井の頭線が開通し永福町駅が開業してからで、それまで2、3軒の家しかなかった。大きなお寺がいくつもあって豊かな緑があり、下町情緒や人情に厚い気質が残っている。



羽鳥 正彦さん
〔和泉3丁目在住〕

昭和30年代前半までは家も少なかったんですが、今は裏道までビッシリで、まさに隔世の感があります。浜田山地区は一昨年すぎ丸が走り出し、ぐんと便利になりました。さ来年には杉並南中央公園もオープンして浜田山の魅力がますます高まります。うれしいですね。



深谷 和子さん
〔本天沼1丁目在住〕

阿佐谷から本天沼まで、ホッとする町並みをのんびり歩くのが好きです。もう46年間杉並住まい。自彊術を始めて20年以上。卓球は40年のキャリア。楽しみながら健康づくりとクラブをとした仲間づくりで充実した毎日を送っています。



安藤 昇全さん
〔浜田山1丁目在住〕

2002年10月、杉並区は区制施行70周年を迎えた。区の歩みを見つめ、共に歩んできた今年70歳の方々にご登場いただいた。「まち」への思いをそえて。



渡邊 泰次さん
〔本天沼2丁目在住〕

私の住む地域には、古き良き伝統や温かさが残っています。さらに住み良いまちになるよう、働きかけていきたいですね。



妙正寺川沿いには、牛がいました。今は牛乳屋さんだけ。昭和35年に来た時、茅葺の農家があり、西武新宿線がよく見えた。子どもが地域に帰ってくるような、そんな下井草を目指して地域センターで活動中です。



小池 静代さん
〔清水1丁目在住〕

このあたりは閑静な住宅街で緑も多く、住み心地がよいですよ。妙正寺公園が散歩にはお勧め。数年前に体が不自由になってからは、地元の商店街の方の親切が、なによりも、うれしいですね。



武田 富乃さん
〔荻窪2丁目在住〕

民生委員などの活動に長年携わってきました。当時は田んぼばかりでした。今は住宅が建てこんでいますが、大田黒公園付近は住民の活動もあり落ち着いた町並みが保たれています。まちは変わっても杉並が多くの人に愛されていることは変わりません。「杉並で一生を全うしたい」という多くの人の願いが少しでも叶うといいんですが。

やはり自分の生まれた下高井戸が一番、子どもの頃は自宅から井の頭線走る電車が聞いた。久我山から井の頭公園まで玉川上水を遡る散歩がおすすめ。



佐々木 博さん
〔下高井戸1丁目在住〕

杉並は原水禁運動をはじめ熱心に地域活動してきた素晴らしい方が多いですね。私は30年前からお年寄りにかかわる活動をしています。多くの仲間を支えられて今日までこられたことをとても幸せに思っています。



河周 子さん
〔松ノ木3丁目在住〕



南北バス「すぎ丸」が行く!



2000年11月にスタートしたコミュニティバス「すぎ丸」は、その車体の愛らしさもあって区民の大人気。阿佐ヶ谷駅から浜田山駅までワンコイン(100円)で乗れる便利な「すぎ丸」でちょっと出かけてみませんか。



戻ってこなかった傘は1本もない「貸傘」



阿佐ヶ谷駅

阿佐ヶ谷駅→浜田山駅

浜田山駅→阿佐ヶ谷駅



杉並区役所から乗車した斉藤富美子さん
善福寺川緑地まで乗ります。阿佐ヶ谷駅や浜田山駅に出るのに大変便利。15分間隔できちんと来るので使いやすい。ここに住んで40年余り、もっと早くやってほしかった。



阿佐ヶ谷駅から乗車したお子さん連れのお母さん
練馬区から来ました。浜田山小学校まで乗ります。子どもを連れて浜田山の友達のところへ行きます。電車だと階段の昇り降りが大変なのでバスだと助かります。



浜田山駅から乗車した須藤康平さん
区役所に用事があって杉並区役所前まで乗ります。すぎ丸ができるまでは吉祥寺経由で大変だった。料金が100円というのがいいね。いまだき100円で乗れる交通機関はないよ。



浜田山駅

京王井の頭線

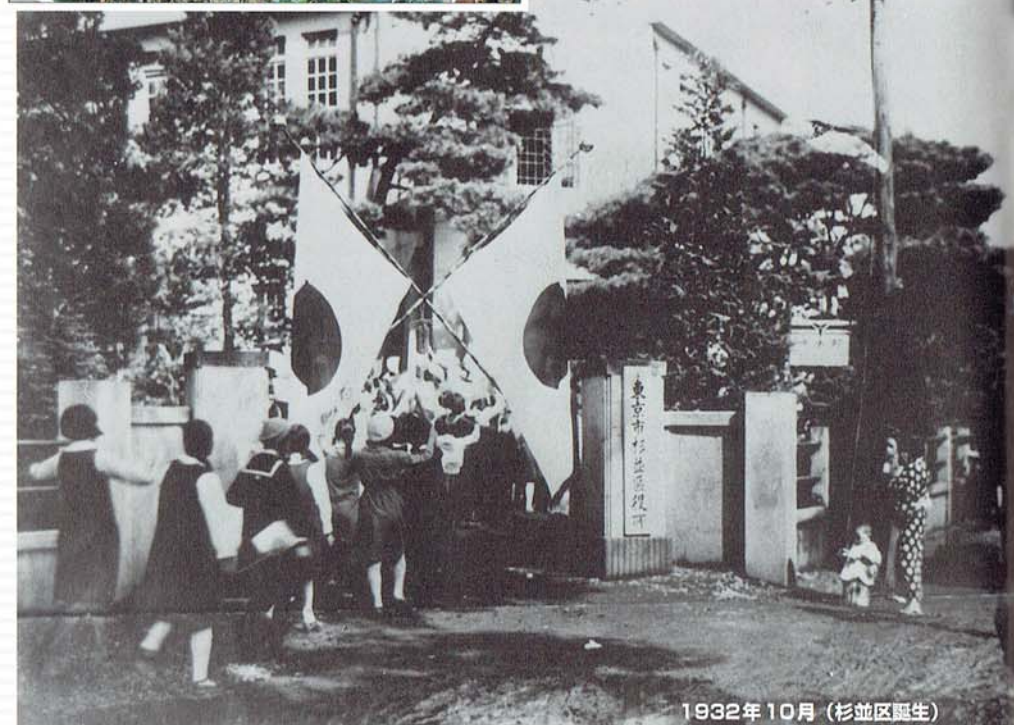


阿佐ヶ谷駅から乗車した宮前明雄さんはじめて乗りました。鎌倉街道まで乗ります。普段は駅まで自転車に乗っていますが駐輪場の料金が高いので、これからはすぎ丸を使おうかな。

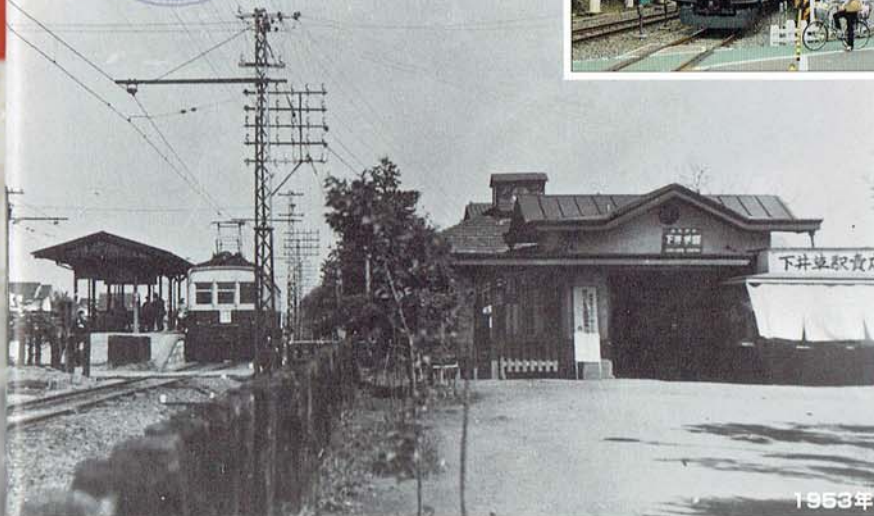


杉並いま・むかし

30～70年前に撮られた写真をたよりに、今日の杉並の姿を追ってみた。
時の流れのなかで「まち」は姿を変え、日々新たな表情を見せる。
それは「まち」が生きている証でもある。



1932年10月（杉並区誕生）



1953年



私が阿佐谷に住み始めた頃は、駅前に人力車が客待ちしていて、夜更けの帰宅のときなどよく利用した。青梅街道には、荻窪から新宿まで路面電車が走っていて、運転席には囲いがなかったので、冬になると運転手さんは厚い外套を着ていた。

そんなことを姪に話したら、「わあ、まるで古老の話じゃない」といわれてしまった。たしかに、もう半世紀以上をこの土地に住んで、移り変わる町の姿を見てきている。しかし、きちんと見てこなかったことを、この頃になって悔やんでいる。あの十五年戦争の最後の頃のことも、きちんと記録しておけばよかったと思う。

いま、パチンコ店や安売りの店ばかりが増えたのに文句をいうつもりはないが、店を閉じるより仕方のなかった、小さな店の働きものだった店主夫婦の姿など、「わが住む町の人たち」として、記録にとどめておきたかった。共に杉並で暮らしの人たちだからだ。私にとっては、夫や姑との暮らし

のすべてがこの杉並にあったので、「わが町」なのだ。

買物で夕立にあっても「傘もっていらっしやいよ」と差出してくれたお豆腐屋さん、「鯛の頭があるよ」と、姑の好物を知っていて声をかけてくれた魚屋さん、阿佐谷のパールセンターもそんな商店街だった。そういう、「ここはわが町」と思える雰囲気が失われない杉並でありたいものだ。年をとると、とくにそんな思いが強くなる。

人の心が感じられる町を

Essay
Yoshizawa Hisako
吉沢 久子

評論家





1963年

五日市街道の
起点 旧馬橋
(現新高円寺)

70



五日市街道
成田東3丁目

70



1963年

五日市街道
宮前2丁目

70



1963年

式守井之助

Essay

Nejime Shoichi

ねじめ正一

作家・詩人



昭和30年代の高円寺北口商店街通りは道幅が狭くてもバスが大威張りで走っていた。バスが通るときに軒先から飛び出ている日除けの幌がひっきりかそうなるので、どこの店にも日除けを上げたり下ろしたりする鎖の紐があって、それをからからと手前にひっぱり、日除けをひっこめていた。しかし、乾物屋を営む我が家は産地から届く荷物が多くて、すぐに荷物を片づけられず、ますます道幅を狭くして、バスが通れず、バスの運転手の中にはすぐにクラクションを鳴らした人もいた。

そんなとき父の虫の居所が悪いと、バスの運転手と大喧嘩になった。近所のオヤジさんたちが喧嘩の仲裁をしてくれるのだが、あるとき、風呂敷包みを持つ髭を繁やしたおじさんが「喧嘩なんてやめなさい」と商店街に響き渡る声で喧嘩の仲裁に入ってくれた。私はどこかで聞き覚えのある声だと思って、そのおじさんを見ると、行司の式守井之助であった。父親もバスの運転手も

式守井之助に気づくと、喧嘩は止まった。「あ、どうも式守井之助さん」バスの運転手が声を上げた。父親もバスの運転手の襟首をつかんだまま式守井之助を見ている。こうなると、喧嘩どころではない。式守井之助にサインを求める店員たちもいる。それにしても髭の行司式守井之助は相撲取りよりも人気があった。式守井之助は当時、高円寺に住んでいて、高円寺の中でもっとも自慢のできるひとりであった。



1966年



1970年(白山前橋から) 加藤肇夫「東京消えた街角」河出、房新社より



1954年



西荻窪に仕事場を持って、かれこれ三十年になる。

仕事場は家にいるときと違った気分になるためのものであるから、家に近過ぎては意味がない。

家から歩いて三分というのでは気分が変わりようがない。

家から三時間というのでは、遠過ぎて通いきれない。

自宅が八王子なので、ドア・ツー・ドア

西荻窪と私



Essay

Shoji Sadao

東海林さだお

漫画家

で一時間弱、このぐらいがちょうどいいような気がして西荻窪を選んだ。

三十年という歳月は長い。

西荻窪の駅からぼくの仕事場までの間、商店街が続いている。

ぼくが西荻窪に来たばかりのころ、その商店街のお店の店先でヨチヨチ歩いていた幼児が、ある年の春、桜の舞い散る通りを、正装の母親に手を引かれて小学校の入学式にのぞむところに会ったりする。

そしてまたある年の秋、その幼児だった人が、お嫁さんと二人で店番に立っていたりする。

そしてまたある年の冬、その二人の子供が店先でヨチヨチ遊んでいたりする。

吉祥寺は若者が似合う街だ、とよく言われる。

その言い方でいくと、西荻窪はおばさんが似合う街、である。

おばさんが似合う街ということは、生活感にあふれた街、ということであり、ぼくの漫画のネタが豊富な街、ということでもある。

BOOKS

もっともっと杉並を知りたい—そんな皆さまのために、区で発行している書籍・資料の一部を掲げました。どうぞ区役所でお求めを。

入手できる区発行の主な書籍・資料 (2002年9月6日現在)

書名・資料名	大きさ	価格	書名・資料名	大きさ	価格
[総務財政]					
杉並区政史	A5	4,500	杉並区弥生土器集成	B5	600
区政60年のあゆみ 年表	A4	1,000	杉並の板碑(新修)	B5	1,100
杉並区史(上・中・下・資料編4冊セット)	A5	25,700	民俗資料目録・寄贈編	B5	1,000
杉並区職員白書 2001	A4	100	杉並の石造物(墓碑)	B5	1,400
[区民生活]					
杉並区統計書 平成13年版	A4	1,900	杉並の石仏と石塔	B5	2,100
[建設・環境]					
杉並区環境基本計画	A4	600	杉並の通称地名	B5	800
空から見た杉並(航空写真)	70cm×100cm	900	杉並の生活史	B5	1,000
すぎなみの植物	B6	600	高井戸雑話	B5	1,100
すぎなみの昆虫・クモ	B6	800	杉並の石造物(鳥居・狛犬・石祠・百度石)	B5	1,500
自然と遊ぶ	A4	700	杉並の小祠	B5	1,400
[文 教]					
神社明細	A5	2,800	[郷土博物館]		
寺院明細Ⅰ	A5	3,300	阿佐谷界隈の文士展	B5	1,100
寺院明細Ⅱ	A5	3,300	旧石器時代の杉並展	B5	200
妙法寺文化財総合調査	B5	4,800	杉並区立郷土博物館常設展示図録	B5	1,000
寺院什器帳(移転寺院分)	A5	2,300	愛新覚羅浩展	B5	800
[文化財シリーズ]					
松ノ木遺跡発掘調査報告書	B5	400	善福寺の鳥たち	B6	1,000
杉並の古文書目録1	B5	1,000	大相模杉並場所展	B5	1,300
杉並の古文書目録2	B5	1,200	東京のクワガタ〜世界のクワガタ	B5	800
杉並の民家 その1	B5	500	吾妻の考古展	B5	400
松ノ木中学校遺跡調査報告書	B5	1,400	すぎ百科展	B5	1,300
高井戸宿の埴地帳	B5	1,800	推心をすてて	B5	800
杉並の摘田	B5	1,000	今川氏と観音寺展	B5	200
方南峰遺跡	B5	1,500	井伏鱒二追悼特別展	B5	400
杉並の寺院	B5	500	祈りと願い〜杉並の総馬〜	B5	1,000
杉並の神社	B5	500	將軍家の台所〜杉並の村〜	B5	1,000
甲州道中「高井戸宿」	B5	1,000	はばたくプリズム	A4	600
杉並の絵馬	B5	1,400	高円寺フォーク伝説	A4	600
杉並の石造物(記念碑等)	B5	700	江戸のこみ 東京のこみ	A4	400
星野家文書	B5	900	井伏鱒二と「萩窪風土記」の世界	A4	1,000
武州多摩郡野方領下井草村編年史	B5	1,500	杉並の考古展	A4	400
杉並の職人	B5	500	杉並文学館〜井伏鱒二と阿佐ヶ谷文士〜	A4	700
			霊宝開帳と妙法寺の文化財展	A4	1,000
			区民がつくる特別展「目で聞くノゾシート展」展示目録	A4変	1,000
			[地 図]		
			公園緑地等配置図	1/10,000	80cm×120cm 1,100

Internet

杉並区を紹介しているWWWページは、区の公式ページ以外にもグループや個人で作成したものなど数多くあります。また、複数のグループが集まって多方面の情報で構成したものに、「ようこそ杉並区へ」(杉並の情報化を考える会作成による「杉並情報」のページ)、「ウェブリング《杉並RING》へようこそ!!」などがあります。ネットの中の杉並区も是非ご覧ください。

区の公式ページ



<http://www.city.suginami.tokyo.jp/>

ようこそ杉並区へ



<http://www.suginami.com/>

ウェブリング(杉並RING)へようこそ!!



<http://www.20.big.or.jp/~wind/suginami/ring/inf.html>

ザ下井草



<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~simoigsa/>

あさがや散歩



<http://www.2.newweb.ne.jp/wd/asagaya/home2.htm>

杉並区何でもリンク



<http://www.suginami.com/s.link/s.link.html>

情報提供・写真提供・

取材協力者一覧

[五十音順・敬称略]

青柳綾子	金田正夫	菅谷奈緒美	中尾みか	星野靖枝	宮前明雄
赤塚京子	河周子	杉之原三廣	長尾け江子	細井照子	村本紀子
新川実	川上利樹	杉山梧郎	永倉裕子	細木繁久	初山進
安藤昇全	河鍋良夫	鈴木智子	中野広美	本多節子	森垣美佐子
五百川純一	川野文子	須藤康平	中畑博	前田綾子	矢代康子
井口秀臣	川本征平	高野惇三	中村愛子	前野淳一郎	安井曜子
伊藤寿和子	木村はるみ	高橋恵子	中山音	前山恵子	山岸哲郎
伊藤尚子	倉兼いそ子	高橋初男	中山大福	牧原哲也	山北徹
岩瀬保子	栗原純夫	高橋光明	中山房江	松原宏武	山越規子
植村三郎	黒田誠之	高橋実	難波千秋	松原由美子	山田収二
遠藤寛	小池静代	武井三郎	西川勇治郎	馬橋武男	山根洋一
大瀧安良	瀬藤恵佐子	竹島昭昌	西村眞一	三村武夫	瑠璃川正子
大谷啓子	小関啓子	竹島洋子	長谷川信子	宮内隆夫	脇坂佳子
大場さやか	小林ナツエ	武田富乃	羽鳥正彦	宮田憲司	脇坂夏希
岡本篤二	小林秀子	棚橋悟	広瀬健介	宮田道子	脇坂春佳
小川昌生	小山倫子	棚橋みづほ	広瀬純平	宮寺修一	渡邉泰次
小川正平	斉藤富美子	長凡	広瀬美紀子		
小原二三	佐々木博	塚田弑也	深谷和子		
恩田錦子	佐藤修一	辻由美子	福地充博		
春日裕	佐藤誠二	寺田明子	藤井良昭		
春日光子	清水高弘	土佐和男	星野信二		

ご協力
ありがとう
ございました!

編集委員

泉 麻人
遠藤 寛 [編集長]
高場清子
高橋 篤
八谷悦子 [副編集長]
松田輝雄

写真撮影/佐々木辰之
イラスト/(有)ファインアーツ
レイアウト・デザイン/高山京子



馬橋リトルファームの
ツゲの木造形園
[宮前5丁目] 79

マップ 杉並



マップ 杉並

南北バス「すぎ丸」

「ぶらり発見すぎなみ歩き」のコース
(丸数字は本書に掲載した場所を示しています)



宮前明雄
村本紀子
靄山進
森垣美佐子
矢代康子
安井曜子
山岸哲郎
山北徹
山越規子
山田収二
山根洋一
瑞璃川正子
脇坂佳子
脇坂夏希
脇坂春佳
渡邊泰次

協力
がとう
ました！



馬橋リトルファームの
ツゲの木造形園
[宮前5丁目] ㊦



「区制70周年を記念して杉並のガイドブックを編集してみませんか？」

区の広報課からお声がかかり、私たち編集委員が初めて顔を合わせたのが2001年11月の末日でした。

どのように編集されても結構です、という寛大な言葉に“ビックリする”やら“うれしい”やら“気が重い”やら、いずれにしても複雑な思いにかられたものです。以降、月2回のペースで会議をもつのですが、区民の皆さまから多くの情報をいただき、区の職員の方々から自然や文化財について興味深いお話をうかがうなかで、ほんやりとキーワードのようなものが浮かんできました。それは「人・人びと・自然」というものです。これを携えて私たちは「まち」へ出ました。そしてこのガイドブックづくりを少しでも多くの区民の皆さまに知ってもらおうという思いも込めて実現したのが、本書の巻頭に掲げた「ぶらり発見すぎなみ歩き」です。自然の再発見はもちろんのこと、多くの人びととの出会いがもてたことは大成功でした。

とはいうものの、私たちの頭のなかにはいつも「私たちの能力からしてガイドブックなんていうものができるのか」という思いがありました。しかしそれも杞憂でした。広報の方々より心強い支援があり、私たち編集委員が一致して(?)偏った見方をしてもかまわないこと、ガイドブックという書名にはこだわらなくてよい、ということになりました。

さて、私たちの偏り方はいかなものでしょうか。

本書を手にした皆さまが「ちょっと、出かけてみようか」という思いにかられたら、それは私たちにとって何よりの喜びです。

さあ、〔(本)書を持って町へ出よう!〕

最後になりましたが、本書にご登場いただいた皆さま(杉並に生息する動植物の皆さま(?))を含めて、陰で多大なご協力を賜りました広報課をはじめ区の職員の方々、ありがとうございました。

願わくば、何年か後に本書の第2弾、第3弾がさまざまな視点から編まれることを祈りつつ、編集後記とさせていただきます。

2002年9月 編集長 遠藤 寛

ぶらり発見 杉並

発行日/2002年10月1日

発行/杉並区広報課

〒166-8570 東京都杉並区阿佐谷南1-15-1

TEL 03(3312)2111(代表)

FAX 03(3312)9911

<http://www.city.suginami.tokyo.jp/>

制作/(株)ぎょうせい

登録印刷番号

14-0088

お
か
げ
さ
ま
で



70

周
年



R100

本誌は毎年100の良書を推薦しています